

### 『ショーシャンクの空に』

1994年／アメリカ／フランク・ダラボン監督作品

必死に生きるか、必死に死ぬか

会員 古橋 夏樹 (71期)

『ショーシャンクの空に』  
デジタル配信中  
ブルーレイ 2,619円(税込)  
DVD 1,572円(税込)  
発売元:ワーナー・ブラザース  
ホームエンターテイメント  
販売元:NBCユニバーサル  
エンターテインメント  
© 1994 Warner Bros.  
Entertainment Inc. All  
Rights Reserved.



大学生の頃から大好きで、繰り返し観ている映画である。定番ではあるが、私が人に勧めたい映画No.1だ。

優秀な銀行員であったアンディ（ティム・ロビンス）は、妻とその愛人を殺したとされ、無実ながら投獄される。

ショーシャンク刑務所では、囚人は刑務官から非人道的な扱いを受けることが常態化していた。品が良く大人しい見た目であったアンディは、他の囚人から性的暴力を受けることもあった。

そのような状況の中でも、アンディは決して諦めなかった。アンディは終身刑の宣告を受けていたので、本来ならば死ぬまで刑務所の中にいるはずであったが、刑務所内で仲の良かったレッド（モーガン・フリーマン）に調達させたロックハンマーで独房の壁に少しづつ穴を掘り、穴の空いた壁をポスターで隠し、脱獄の機会を狙っていた。アンディが投獄されて19年が経ったある嵐の日の夜、アンディはその穴を使って脱獄に成功する。

作中には、アンディの名言がいくつも登場する。中でも次の2つは、劣悪な環境に置かれながらも決して希望を捨てないアンディの生き方をよく表している。

「選択肢は2つだ。必死に生きるか、必死に死ぬかだ」「希望はいいものだよ、たぶん最高のものだ。いいものは決して滅びない」

脱獄前、アンディが、余生はメキシコの小さな町・ジワタネホでゆっくり暮らしたい、レッドと共に仕事をしたいと夢を語る場面がある。レッドはそれを一蹴するが、この物語は最後、ジワタネホで、アンディと

レッドが再会して抱き合うシーンで終わる。アンディは脱獄に成功し、レッドも仮釈放を受けて埠の外に出たのだ。

アンディの気高さと、困難の中で希望を持ち続けたことの偉大さに、私は何度も心を揺さぶられる。

私は小さい頃から野球が大好きで、小学生の頃などは、父と弟と、朝から晩まで野球をしていた。高校時代は甲子園にも出場した。高校卒業後は、甲子園出場と並んで憧れていた東京六大学でプレーもしたが、芳しい結果を出せず、苦しく悔しい思いをしながら4年間を過ごした。また、私は社会人を経て弁護士になっているが、会社員時代、無力を感じることが多々あった。刑務所と、野球部・会社とでは勝手は違うかもしれないが、苦しい中で、必死で生きるアンディの姿から希望を貰っていた。

弁護士になり、独立してから約1年半が経つ。精神がひりつくような仕事も多いが、私を信頼してくれる依頼者がいて、事務所の経営方針も事件の処理方針も自分が決定できることには、言い表し難い充足感がある。苦しい時期を過ごした経験も、今では自分のアイデンティティの1つであるし、少なからず今の人格に影響している。とはいえ、人生の中でやっておきたいことはいくつもある。大谷翔平の二刀流を生で観たいし、アドリア海の真珠と呼ばれるクロアチアのドブロブニクに一度住んでもみたい。家族と穏やかに過ごす時間も欲しい。

選択肢が必死に生きるか、必死に死ぬかの2つであれば、必死に生きて、一生を終えたい。そう思うと、人生には少しだって無駄な時間はないように感じる。